





天

町人囊卷二



或町人の老翁^{ろうおう}れいつ^{いつ}は^は禮儀^{らいぎ}ハ町人^{ちやうじん}とて^{とて}おきて

くれ^{くれ}ぬ^ぬもの^{もの}なり^{なり}昔^{しやう}乃^乃町人^{ちやうじん}ハ實儀^{じつぎ}の^のふ^ふい^いあ

外^{ちやう}の^のさ^さり^りす^すれ^れ一^一今^{いま}の^の町人^{ちやうじん}ハ^ハあ^あら^らわ^わる^るて

過^{あや}美^びふ^ふなり^{なり}實儀^{じつぎ}う^うす^すく^く禮儀^{らいぎ}武家^{ぶけ}乃^乃風^{ふう}を

す^すゆ^ゆく^く魏^{ゑい}く^くと^となり^{なり}町人^{ちやうじん}ハ^ハあ^あら^らわ^わる^るて^て質素^{しつそ}と^となり^{なり}こ

して^{して}外^{ちやう}を^をあ^あら^らわ^わる^るて^て易^い簡^{かん}を^をあ^あら^らわ^わる^るて^て樂^{らく}と^となり^{なり}着^{ちやく}

と^となり^{なり}あ^あら^らわ^わる^るて^て富^ふか^か町人^{ちやうじん}ハ^ハ身^みと^と高^{たか}

ぶ^ぶり^り人^{じん}あ^あら^らわ^わる^るて^て公家^{こうけ}武家^{ぶけ}乃^乃禮法^{らいぽう}と^と似^にを^をて

著^{ちやく}と^となり^{なり}あ^あら^らわ^わる^るて^て終^{しゆう}と^と美^みと^となり^{なり}あ^あら^らわ^わる^るて^て

多^{おほ}く^くと^くあ^くれ^くし^くい^くし^く似^くき^く小^く似^くと^くわ^くく^くは^く終^くは
 一^く國^くの^く風^く俗^くと^くあ^くり^くけ^くり^くく^く過^く美^くあ^くる^く多^く
 一^く禮^く儀^く乃^く果^くに^く驕^くと^くあ^くり^く驕^く乃^く果^くに^く非^く儀^く
 と^くあ^くと^く老^く子^くの^く禮^くに^く忠^く信^くの^くす^くれ^くあ^くて^く礼^くの^く
 端^くち^くり^くと^くの^くあ^くい^くし^く此^くを^くく^くい^くた^くる^くや^く
 根^く本^く禮^くに^く天^く理^く乃^く節^く文^くと^くれ^くい^くお^くの^くま^く分^く
 除^くく^く過^くる^く禮^く法^くい^くれ^く非^く禮^くあ^くて^く驕^く奢^く
 と^くち^くふ^くり^くあ^くる^く禮^く儀^くち^くり^くく^く人^くと^くい^く人^くと^くい^く
 び^くら^くあ^くる^くれ^くた^くり^く禮^く儀^くは^くか^くつ^くも^くそ^く傲^くと^く
 多^くと^く者^く多^く一^く庶^く人^くい^くけ^くり^く禮^くと^く教^くと^くあ^く

人^くと^くい^くを^くれ^く一^くの^くを^くや^く教^くと^くい^く略^くと^くる^くあ^く
 たり^くと^くい^くり^く

或^く人^くの^くい^くく^く無^く欲^くは^く二^くつ^くあり^く天^く理^く無^く欲^くと^く畜^く生^く
 無^く欲^くと^くち^くり^く天^く理^く無^く欲^くに^く福^く壽^くの^くあ^くふ^く一^くあ^く天^く
 下^くれ^く要^くと^くり^く畜^く生^く無^く欲^くに^く身^くを^くあ^くら^くは^く一^く家^くと^く
 一^く一^くた^く一^く所^く人^くの^く知^くべ^くき^くあ^くる^くと^くい^くり^く

或^く学^く者^くの^くい^くく^く儉^く約^くと^く吝^く惜^くと^くい^く辨^くへ^くく^くた^くもの^く
 ち^くり^く吝^くい^く私^く欲^くより^くあ^く儉^く約^くに^く天^く理^くより^くあ^く青^く紙^く
 た^く街^く門^く乃^く十^く銭^くと^く失^くひ^くく^く五十^く銭^くの^く炸^くね^くを^く
 買^くく^く尋^く得^くく^くの^くき^くく^くい^く是^く天^く下^く乃^く貴^くと^くい^くふ^く

○西ノ集卷二
○二三
私乃利を忘れしう倭乃道なり異國よと此
例なり程伊川雍華の間みなり終一河一貫
乃錢をりて馬に鞍しほき心金よつきて
るふ錢あり僕夫のつく今朝装いあらふ
而て失いし人の水と流る時落しめんと
とい時伊川あげさういて千錢可惜と
つふ河に坐中の二人若くいつる一貫の
錢を失ふといさく惜と事うれしふ又一
人のつるは千錢の微き物なり何ぞをとり
いふんやといふ又一人のいふ水中と臺中と

異なり事れし人失いし人是を得るふ何ぞ
嘆んやといふ伊川のいふ人これと得る事
あつたふといわに錢の天下國は用ある物
なり若水中に沈むといふ水く世に用ある事な
る人いふいふとあけくとのいふいふ青
砥た塙門のうろとむる事ありいつれも其
錢を天下れるふ惜といふもの一粒乃米一
枚の紙も吾國は費し失ふ則天下れ用物
を費し失ふ道理なれ天地造化の功とを
こちよの咎なり此さうと守りつゝいふ人

ひりあてりけり

或人のいふに諸君富れものい多くい慳なり
慳あるは不富なる者い多くい愚也愚
みあてりけり不富なる者い多くい慳なり
はくむに多てい財寶多く貯れり
わさりとほりてや非義の謀計とありあ富り
きくむにや富る人の貪み人より却て罪
なりとせん五穀貨財多きを賣とり買の
とむいのみを富る所人の志りざりて天下万民
の用紙多きもの一人富るは多き人なり

貪者よ此衆なり貪い世上の福乃神といふ
あり田舎の一家とほり漢といふ船とて水
汲きくものきくのみを貪者の所なりて天
下れ重寶思ふ大なる福乃神といふ此故に
人民の二字をみんありと訓と書經に
民をいひてく下とく民の惟邦の幸
なり本固なれい固寧といふいんや町人無
位の身なりて僅の財寶を鼻とありて貪者を
いふに慳なりといふなり

或人のいふに富るは常位なり我知るに凡人の

舟の逆風人れ舟乃順風我亦の逆風なり様敷
隣よりよき風をたまたみ宿るは往くは往く
つよきのふと世にあつたものなり富ふ人乃
財寶減る付い貧家。財と益貧家の富ん
事と移りて日用のつらみおろしに富る家
いふく財寶と持てんて家業を勤めて懈
らど相するいふらとあれなり今と世間の立
ころもの也金銀貨の根本天下萬民の用物
なり一人して貯ふはる多き何の万民の用
をなとて貯ふ此故一人過人の金銀を

あつた事なれどいつても叶ふと多く一旦
千万の財寶と貯ていつた永く陣中かの
積るに其金銀死寶と成る金銀は徳用
なり自他の重寶と成るなり此故に藏の中
ふも往く積るものなり思ふに執りて
富むるにその事と謀る其謀るなり
つて小利大損とあるものあれものつやむ
くあつていつて富んてはけしむ
自然のいさひなり財寶増す極する所は
くねと減る我財寶減る人乃財宝と

増我財宝増くたへ人乃財寶減とる乃理あり
ちと人の天地陰陽の二氣の常住普く流行
して一而く久く留滞とる事なり若陰陽
一所く久く留滞とある所の付は是氣の偏
ちるがゆへなり天地乃変災となつもの也
天下の金銀も又ちとてたれ万民は普く流
行して一而く久く留滞とるに留る所の又
してははるく散じゆく是自然の理なりと
いふ終るじぢなりれ
或人のいふ禮記は志の満つるに樂の極へり

とあり又易の豐卦は日中とれは是は月盈
もは別食天地の盈虚と時消息といふんや
人は世をそや況や鬼神はおかてそやといふ
是等の教へとるれは常住のわいともたへ
ては世のちるふか松樹千年も終る朽れ槿
花一日もかのたつる榮衰みんと語ふる側
より金もたつれ終るちるがさう物といふ松樹
千年も終る朽れちるがさう物といふ松樹
と世といふは月満といふ虧ふとて不斷と
日月もそは埒いある世をものをとては

うつゝいゝてわづらひ

或人の云ふ所の頼み望み先おのまが身をお
さあつゝをふゝくちくは其まの成就を
ゝ紙待ぐ一町人の富を求む其基をく
して果報を待ひみろくたり楚辞は曰善は
外より来ぬ名い虚くあまゝに執り施し
りて報いあらん執り不實して獲てあら
世話も綱をふて測るのぞみろくあれま
ゝと種うまひきいてわづらひやその詞あ
るれゝその意聖人れかへみ同くまの

かりといふ

或人の云ふ葉玉指とて人毎は自惚せろもの
あゝと人儒書めと満い損と招と謙い答紙
受とんえの道也とあり佛經と七惚の説あり
危角自惚いとあぐわろとろくろり学問才智
藝能く自惚とろいよのつひれる也あろ賢さ
人い其惚をとろく押へろて外にわゝいと
びて人よ謙とろやとと此なり惚をか
きろゆといつゝとろい惚をされまろは又
ふはく氣質は字ある者いんをろりぬく

藏^{くら}り多^{おほく}るわこいれと傍^{はた}ふ詞^{ことば}あられ容^{よう}よお
 て人^{ひと}よ多^{おほく}る情^{なさけ}まるむらにつゝと心得^{こころえ}てあういか
 るきわらうらうら諺^{ことわざ}て内^{うち}ふは喜^{よろこ}ぶ傍^{はた}あう人^{ひと}
 わり何^{なん}れと一^{ひと}藝^ぎあう人^{ひと}いうれと傍^{はた}あう又^{また}五^ご
 藝^ぎて終^{はつ}てと傍^{はた}あう者^{もの}あり民^{たみ}系^{けい}圖^ずを自^{みづか}傍^{はた}
 一^{ひと}分^{ぶん}別^{べつ}を自^{みづか}傍^{はた}一^{ひと}達^{たち}老^{らう}孤^こ自^{みづか}傍^{はた}一^{ひと}財^{さい}寶^{ほう}一^{ひと}
 自^{みづか}傍^{はた}と親^{しん}親^{しん}自^{みづか}傍^{はた}男^{おとこ}自^{みづか}傍^{はた}あうこれの事^{こと}と
 ちく一^{ひと}文^{ぶん}あ通^{つう}ちる者^{もの}い又^{また}何^{なん}の自^{みづか}傍^{はた}とちる
 わんとや人^{ひと}い是^{こゝろ}と自^{みづか}傍^{はた}あう不^ふ求^{もと}不^ふ貪^{とん}不^ふ
 誦^そ一^{ひと}公^{こう}とつて自^{みづか}傍^{はた}とこれ一^{ひと}公^{こう}自^{みづか}傍^{はた}と

いと形^{かたち}は法^{はふ}を謙^{けん}て心^{こゝろ}公^{こう}人^{ひと}は傲^{おご}氣^き豪^{ごう}あう者^{もの}
 りわり是^{こゝろ}と卑^ひ下^げ傍^{はた}とつて此^{こゝろ}志^しあう町^{まち}人^{ひと}い
 るりつと多^{おほく}る又^{また}故^こ郷^{きやう}自^{みづか}傍^{はた}あう天^{てん}竺^{ぢく}い佛^{ぶつ}國^{こく}
 一^{ひと}唯^{ただ}我^{われ}獨^{ひとり}尊^{そん}の大^{だい}公^{こう}此^{こゝろ}の國^{こく}い栗^り敷^{しき}國^{こく}也^{なり}
 と自^{みづか}傍^{はた}と唐^{たう}王^{わう}い聖^{せい}人^{にん}の心^{こゝろ}て天^{てん}地^ちの中^{なかつ}ふ
 萬^{まん}國^{こく}第一^{だいいち}仁^に義^ぎの國^{こく}日^{にっ}月^{げつ}早^{そう}辰^{しん}と此^{こゝろ}國^{こく}を第^{だい}
 一^{ひと}と思^{おも}へ終^{はつ}てつて自^{みづか}傍^{はた}と又^{また}日^{にっ}本^{ぽん}い神^{かみ}心^{こゝろ}
 世^よ界^{かい}乃^{なり}東^{とう}あうて日^{にっ}輪^{りん}好^{こう}く思^{おも}へ終^{はつ}て國^{こく}は
 て地^ち靈^{れい}人^{にん}神^{かみ}也^{なり}美^み公^{こう}才^{さい}一^{ひと}の心^{こゝろ}て令^{しやう}限^{げん}と
 多^{おほく}る豊^{ほう}林^{りん}津^つ國^{こく}と中^{ちゆう}津^つ國^{こく}と浦^う安^{あん}國^{こく}と

つて自ら自憐と此三國おのく自憐なり自憐より
して其國の作は政道なり又大なる自憐を
天地の同はせしむる物なり其國は人と貴
しと此故に人の天地の靈と異なりとて誰
の思とゆふて名付たるや人間されとこれを
名付たり此自憐の心して一日もくんば有べ
くはるる人貪賤を食の身なりといふも
麟鳳のそとにほえたり人れんる義を自
憐して靈物なり名付たるもくはるる心なり但
くはるるも又自憐なりとさればとて知て止む

或人の曰氏のけふふ茹子いさぬといふもハ貌
の上のあふみであつたれをといふわど人間
のくはるる十人は七八人いづれなりた又母は似る
ものなり但又母いさなり似るものなり
わり又あひれおなる遠く他人は能く似る人
多し多し人くはるる又母は似るものなり
似るものなり容の容は似るものなり
諺をて実とされくはるる氣なりけつぎ
ものあれは似る人さばわりぬやわていさけ
ちたなりくはるる事なりこの多きなりけつぎ

習ひゆくものなれども始より定りてくるもの
わが父母賢くして子に不肖は父母不肖して
と子の賢かり是れ又一偏はわが縁とてん
町のくじ似我蜂の別の虫紙りておのまじり
形も変化とて悪人れり子なりた善人れり
して教ふに悪逆とてくじ程乃罪人といはる
ゆゑとやされども鶯のうゑるれ中の時鳥乃
多かりしわがいに善人よりいへば悪人悪人
愛とあるも多れもわがや武家みか神種とい
悪いづくよりうすむる又剛にして子の腹より町

人みな神民なりけりけりけりけりけり
ゆめとて子の驕り又剛ありとて代ありと
又候ありとてそのひとていへり
わが人の物語は後醍醐天皇の賢長藤房卿の
のまじりの末代の人の借物をとるこゝに
怒りありけりけりけりけりけりけりけり
乃四代に乱れとて無道なる人より多りけり
これに借物とてつれて怒りありけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
人々やうけ人の財寶とてけりけりけりけり

後世の事とけし身の分際と計りて其けり
より其終を分りて人の財寶と假い事
入を事りて世とて其終を分りて其後
世に人として又い過美の驕よりて其用事
不足めて他乃財寶と假者いこれと邪あり
と又人として此に人として當座乃
利邪ありて邪心とて人な假い邪心
徒邪心をしき人自他の利を計りて其
始より利分の事とけし其人を恒に懇意
のほりて其終を分りて假と者い此心なりけり

人の西理をりて借用し西理にりて
假とて其やまのゆへに假人もこい
とていふと假とて人も慣貪り責
る事ありて其代は邪偽とあり
多し人の財寶は假事多くありて
驕の心ありて寝ははる人の多し
なり世にありて事されいといふ
假人といふ又邪欲ありて又い情
存死一倍の事ありて世にあり
る事ありといふ事ありて借用と

取く〜末代へ借用と取くを以て終る
 もらうもやがきものい借用なり果
 竟相對の邪欲より事無から事
 中へおとせ上乃令銀い天下
 万氏乃令銀なり一人中なく一先
 をれて人のくけ〜紙あさんい聖賢
 乃あろういあ〜とふ乃ゆ〜い
 中りあろ人乃財寶紙きろる人よ
 して天下の用を達き〜じいま
 乃代〜うまれてい聖賢〜つた

上束と得てい〜さる事あ〜い〜苦め
 るあ〜骨を〜れてい返さるあ〜ん世故よ
 一生人の財寶と〜ぬ〜い〜日夜を〜紙
 事〜紙い〜足と君みれ分別とす〜語は
 ある人のい〜い〜草い〜つ〜る〜事也
 其中に陸奥守平定時あ〜長最明寺入道殿
 より呼ら〜事あり〜や〜る〜ん〜返る〜
 ち〜直登のあ〜て〜や〜ん〜延〜で〜終〜
 最明寺殿推事あり〜事〜あ〜の〜つ〜い〜ぬ〜や
 夜中るれい〜裏〜ら〜あ〜て〜疾〜あ〜い〜よ〜い〜終〜

使わりの着せしむる直垂とて着せしむ
最明寺殿維子に土器とておまへぬ此酒を
いへる給ふんさびくたれぱつづつとあり着い
まけし何と勝ぬよ有りやきん人いふれ寝
あつするめんとつづつとてぬれよとあり
は紙燭とてわらうと来り終つた何と
なくて是所の柳よ小土器は味噌の少せり
をうけて思ひぬれとてさうぬくわうと
事足ぬとて教献と酌てぬく興よのうと
わうとあり成るものよとぬれぬ其時代の風俗

質素易簡の神あるを付て観念とてふ討詰
めて感涙とぬれぬとてぬれぬとてぬれぬ
よはるもの事と國てもぬれぬ何とぬれぬ物
詰のぬれぬとてぬれぬ人ぬれぬぬれぬ
天下とてぬれぬ人ぬれぬ何のぬれぬとて
ぬれぬとてぬれぬ美食とぬれぬとて小土器
付る味噌とて事足ぬとて下人の労といふ
ぬれぬとてぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬ
ぬれぬとてぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬ
人ぬれぬとてぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬ

かねて不審かりよきかれもひうへ近代乃如
 くに衣服も品もありゆへ官位ある人といふも
 直玄藝晴二よりうへへおちかくはく垢付
 ぬとい洗いて用いりて也室時其折ぐに
 晴暑の直玄洗濯ありぬくやといふあうあ
 うと時務ふそかれと語れ
 又同じ人のころい今の世にもとる料理物
 りをさういといふやといふやとてさうい多く
 今れやととる物といふやといふ人いさし
 りされ物多きや今のやといふと果さる

もの禁中かといへ萩の花といひて女中おど
 さこころとて也いふ乃かといふところと萩
 の花の事也最明寺入道殿足利た馬頭義氏の
 許へ鶴岡社系の次子に立よとを給ひけし一
 故よりあらむ二故は海を三故はいひしら
 してやぬといふとく草にあり今の世に少懸
 ちる客人おどいふもあらおどい中く教うそ
 物されぬにゆへなり此おぼさうい多し又近
 代に雉子よりハ馬と貴うていふといふハ馬と
 賤しとせしや雉子松茸をいふは湯湯殿の上

るひりふはしくけく以後深草院の中宮れ
沛方の湯湯殿乃上れ棚は鷹のやうな中宮
乃沛又常盤井相國沛後とてやうの物され
く且婆ふあはに極わき事なりといはしめ
信いゝとて日本より雉子へ上代より貴人の
調食ありとて鷹へ上代の人の食せざしもの
して中宮よりとてやうな此故實に
て雉子よりいふとて料理の間乃棚あり
とて例るは是又質素とて實とて過美の
物を是といふとてやうな風俗なり湯殿といふ料

理の間なほさう浴室の儀はわはにやうの
事あり今の町人れふあはにやうな事
ありとてはさうな事なりとて

あり人のいふはなれ今れは黒王のやうな
身はやうな商人のやうな事なりとて
とてありとてまゐる今の羽二重の敷や
貫之の時代をいふとて羽二重をいふは
まゐるのやうな事なりとて目形はむの敷
をぬきとてはなれやうな商人をいふ
は相成りなりとてやうな事なりとて

をやらせしむ今の世は町人までよれぬ事
事なれど身小ゆふはゆふと其根
禄多うた武士公家のとがさといふか
ところなくそんゆふあられとおのつる相
せう事こそいふと武家の供人多く馬よ鎗
よりあふ多きはまれと町人の唯一僕と
羽二を縮紗といふ人たれとあて身にお
くぬさぬなり武家とみまはけく供は
又町人といふ人へ羽二その羽織と着る
名のきくと口しきとも終る名のきとを

へかしてゆふとそゆふといひて多し
都よりいふ町人何とてや一生脇指とさ
まろし武人日本の風俗と刀脇指を礼儀
とす武勇の爲のといふはこれといふ言ふ
つゝの禮義は羽織又の袴を着るおれ
ゆふの礼儀は武士へ武道を常に忘る
が役なり此なり人といふと九腰なり武
士の武と忘るにたふぬ無禮なりといふ
町人の思ふ異なり何そ一代は一度も用
ふはるなり道具と常に着て一生乃

同窮屈とらんや唐人の千里万里の旅
り丸腰なりとて終る鬼は冷とて事
を笑と泣く事神代のかげける一徳の
扇子一本をいつる事易い事をとて
く丸腰なりとて是程は道理の明か
き物をいへばとて町人の短き脇指も大
脇指をいへばとて町の武士の似をお
よりいへば其儀乃町人こそを安くと延
時代乃分別とて人々又多く
あり富限なり町人の子孫唐乃天神を信

して家内へ安置し毎日の拜禮おまの備へ
物ねとて事れし其又思ひとていと
いつらいやめのもり人れとてとて弛走しとて
があんより此とて天神と祈りやうとて
しとてはし親先祖の功業よりとて今日
子孫安樂なりとてとてとて思ひに
いつら神の神恩なりとてとていつら神
のまゐりとて長者のまゐりとてとて
とて親先祖其身小艱苦なりとて子孫多
く財寶とていつらとてとて其思ふ方

依はあは唐土とて親先祖の靈魂と別天地
乃神明一體とて祭事いふたうなりと
つふ人あり

或人のいふに豊年とて八木下直されい武家困
窮なる故に世間商賣なくて町人のあやむ
ゆゑといふもいふの道理なりとて所審
あふにそ八木を直ちなりぬる民餓死せし事
ありとていふなりといふも八木の直ちと
くて商賣とてなりぬる餓死なりといふも
はゞどは是衣食の事なりとていふ者乃十

分は飽満なりとて紙移ひて常に貧窮なる民
れは紙を移しなりぬるものなりといふも町人の
世は紙を移しなりぬるものなりといふも金銀れ
殖する事とて多く商賣して金銀とゆふ
貯ふんとていふなり是富は紙かき移人とする
乃大欲不仁なりものなり町人なる者此念とて
とていふなりとていふ事とては用不足と
いふ事なりとて用不足といふ大欲の移し何れ生
とて事なりとていふ事なり

町人囊卷二終

